

# 東京バッハ合唱団 月報

[第547号] 2008年1月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.547  
January 2008

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

第102回定期演奏会(2008年6月)の曲目

## 嵐から光の日々へ

大村 恵美子

皆さま、新年おめでとうございます。どんな世の中でも、1年ごとの節目に、また真っ白な気持ちで人生が始まる元日を迎えられるのは、とてもありがたいことだと思います。

「カンタータ50曲選」の大きな企画が完結し、ひきつづき《マタイ受難曲》とモテットで創立45周年を祝ったあと、第99回定期からまる2年を隔てて、ふたたびカンタータばかりの定期演奏会にもどります。

私の本心では、生きているうちにバッハの全カンタータのどこまでを演奏できるか、という情熱を、この合唱団存立の原動力としているわけですから、カンタータ中心のプログラムへの復帰にあたり、喜びもひとしおなのです。ほんとうは、これまでに一度も演奏していないカンタータ(たぶん60数曲)ばかりを百パーセントとりあげてゆけば、目標は最短距離で達成に近づくのですが、既演のものにも心は充分動かされますし、せっかく「50曲選」として楽譜をつくったものにも、それをういて定期演奏会に臨んだことのない曲が残っています。

第102回の曲目は、それやこれやで心乱れる中から、つぎの4曲が選ばれました(すべて新規の発行楽譜)

1. BWV102...初演
2. BWV67...再演。第67回定期(1990年)
3. BWV169...初演。ただし野尻湖にてpf伴奏(2005年)
4. BWV182...再演。第1回、9回、45回定期(1979年)

ところで、教会暦を大まかに考えますと、アドヴェント-クリスマス-受難節-復活節等の、教会全体で守るイベント(だいたい冬から春)と、三位一体節以降の、信徒個人の修練・教育を主眼とする期間(夏から秋)とに二分されます。今回の4曲を教会暦順に並べかえてみると、BWV182が棕櫚の日曜日または受胎告知の祝日(初演:1714年3月25日、この年にはたまたま両者が重なった)、BWV67が復活節後第1日曜日(初演:1724年4月16日)、それに対して、BWV102が三位一体節後第10日曜日(初演:1726年8月25日)、BWV169が三位一体節後第18日曜日(初演:1726年10月20日)です。

私は、全体を<嵐から光の日々へ>と捉えています。人生一般についても、心の闇との葛藤、世界の騒乱、という内と外との混沌状態をへて、神との和解、宇宙的秩序の受け入れへと安寧の境地にいたる、これが順当な人

生目標ではないでしょうか。はからずも、これに沿って第1ステージが「動」の2曲、第2ステージで「静」とは言えないまでも、結論的な落ち着きへと向かいます。

第1ステージ:

1. BWV102《主の目は 信仰を見たもう》これは、イエルサレムの滅亡予告の旧約聖句(エレミヤ5:3)をうけて、イエスが泣きながら語った言葉(ルカ19:41以下)

### 2008年の活動予定

新年練習開始

1月12日(土)15:30-17:30

世田谷中央教会(桜新町、以後毎週土曜日)

[新年会]11:00 小田急線「千歳船橋」駅改札  
集合、大村先生宅訪問、12:30 ビストロ・オ・  
ランデヴー、15:30 練習会場

1月14日(月・休日)18:30-20:30

目白聖公会(目白、以後毎週月曜日)

第102回定期演奏会

6月21日(土)14:00開演

めぐろパーシモンホール

<演奏曲目>

BWV102《主の目は 信仰を見たもう》  
BWV67《留めよ心に 主イエスを》  
BWV169《神にのみ わが心献げん》  
BWV182《天(あま)つ君を 喜び迎えん》

夏の特別演奏会(予定)

7月21日(月・休日) 世田谷中央教会

8月2日(土) 野尻湖・神山教会

<演奏曲目>

BWV8《み神よ わが死はいつ》  
BWV191《グローリア 高き天なる神に》  
BWV131《深みより 主よ われはなれを呼ぶ》

野尻湖合宿(予定)

8月1、2、3日(金、土、日)

第103回定期演奏会

12月13日(土)14:00開演、杉並公会堂

<演奏曲目>

BWV122《新たのみどりご 小さきわがイエスは》  
BWV214《太鼓よ鳴れ ラッパよ響け》  
BWV75《貧しきものは食し》  
BWV191《グローリア 高き天なる神に》

に発しますが、それが私たち人間のかたくなな心から起るもので、厳しく悔い改めが要求される内容です。

2. BWV67《留めよ心に 主イエスを》使徒トマスの、主の復活への懐疑に対して、よみがえったイエスが安かれ、なんじらと、長くひきのばされた音で、14回(バッハ自身の名BACHの数、2+1+3+8)も呼びかけ、その合間に、弟子たちの心の葛藤、世の騒ぎへの挑戦を、まるで戦場のただ中の光景のように、いきいきと映し出します。

第2ステージになると、これらもろもろの争いが;

3. BWV169《神にのみ わが心献げん》冒頭のシンフォニアで一掃され、神のみもとに身をゆだねる至福へと変わります。アルト独唱が 神にのみ わが心ささげんと、自分自身のゆれ動く心に刻みこむように、くり返します。

4. BWV182《天(あま)つ君を 喜び迎えん》凱旋將軍の白馬ならぬ、そこら辺から引いてきたロバに乗って、イエスがイェルサレムに入城する。トランペットもティンパニもない、細いが玲瓏と空気を伝わるリコーダーと弦をともなって、もの静かに現れる行進曲です。終曲の いざゆかんサレムに も、舞曲風ではありますが、いわば、神と共生するわれわれ自身の心にむかっての凱旋なので、自制のきいた、秘めやかなフィナーレです。

バッハの作品にも、もちろん爆発的な歓喜で始まりまた締めくくられるようなものが多数ありますけれど、この、バッハが29歳の若さでつくった182番のように、清らかに、雑なものを削ぎ落として神の前に進んでゆく、という終り方のほうが、本来的なバッハの姿であるような気がします。この4曲で、私たちはこのように、心の旅路を一望して経験できるように思います。それぞれのカンタータとの出会いを味わいながら、もう2007年12月から練習が始められています。何もかも新しくスタートするこの良い機会に、多くの方々の参加をお待ちします。

## 新年の抱負

菅間 五郎

「新年明けましておめでとう御座います。

昨年もあつという間に過ぎ去りましたが、私にとっては又々忘れ難き年になりました。バッハを日本語で歌う合唱団に入り、生まれて初めて2つの大ステージに立ちました。マタイ受難曲を東京の杉並公会堂で130名の団員と共に日本語で歌い、更に四国の松山市民会館大ホールにてドイツの合唱団と松山バッハ合唱団の合同演奏会に賛助出演する形でドイツ語で歌いました。全くの冷や汗物でしたが素晴らしい経験をさせてもらいました。その感激正に筆舌に尽くし難いです。

嬉しかったのは待ちに待ったあのサンチャゴ巡礼の

映画( )が日本で日の目を見、映画を見て7年前に自分が歩いた800kmの道を再び歩いているような気になったことです。

この長生きの時代に還暦のパーティーなどは聞いたことはないと言われながら強行したあの時から丁度10年経ち今年が古希の年となりました。この感慨を短歌にてお届けするのが一番の贈り物と一人合点し、3首を書き添えます。

忘れ難き 年を重ねて 七十年

嗚呼あり難き 父母の恩

何時しかに 片足墓場の 身なれども

勇みて我は バッハの森に

不思議なる 縁を持ちて 生れし我

大和の外に 数多なる友

来年(2009年)合唱団は創立47年目の年を迎え、5度目のドイツへの演奏旅行を計画しており、置いてけぼりを食わないように、今年は更に精進するつもりです。」

以上は、実は私の年賀状で、この度端なくも新年号の紙面に加わらせて頂くことになり、光栄の極みです。ここで改めて団員の皆様に年初の挨拶を申し上げます。旧年中は歌を歌えぬカナリヤならぬ新参者を暖かく迎え、見守って頂き有難うございました。

マタイ受難曲と一緒に日本語で歌いませんか、という魅力的な文句に誘われて入団して1年半が過ぎ去りました。あいつのことだから合唱団から直ぐに飛び出すに違いないという悪友たちの憶測をよそに、目白と桜新町の教会に通い続けたことは、正直に言って、夢想だにしませんでした。これまで続けて来、これからも続けようと思わせるものはいったい何物でしょうか。思うに合唱団には歌うこと以外に私を惹きつけて止まない物があるのでしょうか。それに違いありません。ノーベル文学賞を獲ったことのある南アメリカのコロンビアの詩人ガルシア=マルケスが、リンパ腺癌に冒されてすべての活動から身を退くに当たって友人たちに送った遺言の中に「いつも心に感じることは口に出してお言いなさい。思ったらやることです。」という文句があります。この詩人の生き方に深く共鳴している私は、この文句を念頭に今年も精一杯合唱団の活動に参加したいと思っています。

既にドイツの友人から演奏会の日程が決まったら知らせてくれ、どこへでも出かけていくというメールも入っており、抜き差しならぬことになりつつあります。

(団員:パス)

) Laurence Boulting 監督「WITHIN THE WAY WITHOUT ~内なる道を求めて~」

【出版協力募金】報告 2007年12月25日現在

ご応募: 80名(ご寄付、楽譜・CD購入など)

合計額: 5,102,000円(以上累計)

達成率: 51%

目標 1000万円

## 創立 45 周年のクリスマス会

高野 京子

「45 周年」という言葉を、この一年、何回耳にし、心に思ったことでしょうか。大村先生もかなり声にし、文章にも書いておられたように思います。さぞ、言葉に言いつくせぬ深い思いをお持ちのことでしょう。創立当時に合唱団にいたというだけの私でさえ、いろいろな思いがめぐります。あの時、誰が、この 45 周年を思ったでしょう。今ここにいる自分が不思議な気がします。今までの周年演奏会と異なり、3 月も 11 月も大変重みのある記念演奏会でした。《マタイ》は大曲のため早くから始め、取り組みが長かったこともあります。創立 45 年の歴史を思う故でしょうか。

2007 年は、本当によく歌いました。3 月の日本語によるマタイ演奏会(第 100 回定演)そして、参加させていただいた 6 月の松山でのドイツ語によるマタイ演奏会、休みなく上昇気流に乗って進んでいるようでした。そして、例年より 1 月早い 11 月の第 101 回定演、ここで歌われた 3 曲、モテット第 1 番、第 3 番、そしてカンタータ第 65 番は、いずれもかってソプラノで歌い、しかもモテット第 3 番は、1988 年、私が復団した年のドイツでの演奏旅行の思い出深い曲です。しかし今度はアルトで歌いました。うれしい反面、うっかりする私です。7 月(自分の都合でお休み)8 月(合唱団夏休み)と 9 月が待たれましたが、心配でもありました。自分なりに珍しく自主トレをし、そのおかげでバッハを歌うには、積極的に、そして、勢いが必要だと感じました。

さて、定演が早く終わり、ちょっと気のぬけた反面、ほっとした気持ちのなか、年間最後のイベントである合唱団のクリスマス会が、12 月 17 日に、目白聖公会で開かれました。はじめにバザーを 30 分。司会者は、いつも気分をゆったり、ほのぼのとさせてくださる B 山下さん。中央には手料理の持ち寄り、差し入れが豪華にならべられ、飲み物も沢山。乾杯は、B 菅間さん、名句を詠まれましたが、その内容が月報に載るそうです。ご馳走をいただきながら、山下さん選定の合唱団十大ニュースが映し出されました。大村先生のお話の中で、やはり気になるのは、出版の負債のこと、早くなくしたいとの思いが伝わります。[前ページ下の報告、ご参照ください]

お楽しみコンサートが始まりました。

団員によるものとして、フルート二重奏(A 平田・T 大村) 女声全員合唱 BWV469、A/T 有志 BWV155 アリア(A 田中・牧田・前田、T 橋本・大村・松尾) 男声全員合唱(聖夜の八モリが素晴らしい)、オペレッタ《カルメン》(S 菅原・A 川合・T 橋本・B 松尾) お客様によるものとして、大村亘さん(元団員、自作のピアノ弾き語り) 渡邊冬二さん(元団員、フルート演奏) 若土規子さん(ピアニスト、ラベル《水のたわむれ》) 金澤亜希子さん(ピアニスト、コダーイ《七つのピアノ曲》より) 全員合唱

(ボンヘッファー《善き力にわれ囲まれ》)。

時間もオーバー。あっといふ間に楽しい時が流れま

した。皆で片付けて散会。

出席者 44 名。お客様(演奏された方のほかに)B 柳元さんの奥様と彩音ちゃん(10 ヶ月) 志磨村和香さん(平田さん友人、新年より入団)、三好様(A 三好さん知人、新年より入団)、越智恭子さん(A 康さん友人)、四方恭子さん・小野川公成さん(S 川合さん友人)、大村先生、団員 S 8 名、A 13 名、T 3 名、B 6 名。

家路を急ぎながら、楽しく、暖かで、幸せに包まれたクリスマス会が出来る平和な日本のありがたさと、こうして楽しく合唱団へ通えることに感謝せずにはいられませんでした。(団員:アルト)



写真提供: 菅間五郎氏, 川戸龍夫氏



## 新年も、心をこめてバッハを歌いたい

中村 桂子

昨年末で、勤めていた派遣先の会社を辞めることになった。派遣社員には退職金制度がないので次の職に就くまでの間、当然その日から収入は 0 になる。そこで、せっせと仕事を探してはいるのだが、残念ながら今のところノーヒットノーランに終わっている。応募に必要なパソコンのスキルも実務経験もほぼ満たしているのに、選考の最終段階までくると、担当者はあらかじめ録音しておいたテープのように同じ台詞をくり返す。「すみません・・・とくに問題はなかったのですが、ただ若干年齢が高いということから、残念ながら難しいようです・・・」つまり早い話、40 歳になるおばちゃんを喜んで迎え入れてくれる企業などそうそうないのである。がしかし、若い子でなければ駄目などと言っているのも今のうちで、このままで行けば超高齢化社会は確実に訪れる。

人は例外なく誰もが歳をとり、やがて死にゆく運命にある。私たちはこの世に生を受けた時、何も持たずに生まれてきた。そして死ぬ時も、たとえどんなに莫大な富を所有していようが、孫が 100 人いようが、生まれてきた時と同様に何一つ持ってゆくことは出来ない。

物質 とは流れる雲の如く儂いものだなあとつくづく思う。だが 想い というものは、決して滅びることはなく、永遠のようなそんな気が私にはするのだ・・・

私はバッハを歌っていて、そのことを強く感じることもある。バッハの音楽は、落ち込んでいる時に聴くと、昇る朝日のように勇気を与えてくれ、また悲しい時に聴けば、聖母マリアのように私を抱きしめ癒してくれる。

かぎりなく美しい旋律にバッハが込めた神への思慕、人間に対する深い思いやり…その 想い が、何百年の時を超えて私たちの元に届いているからではないだろうか…。

6月の演奏会に向けての新しいカンタータの練習はすでに始まっている。まだまだ思ったように声も出さず音程も怪しいが、精一杯心を込めて歌いたい。

(団員：ソプラノ)

## みなさん、日米安保条約はもうやめませんか

森井 眞

60年安保のとき、私はフランスにいた。経済小国日本の記事などめったに載せなかった仏紙も、日本人が初めて市民として目覚めて立ち上がったかと思われたあの闘争を、ほぼ連日大きく報道し、ことが終わったとき事件を総括して、ル・モンドも地方紙も、私の見た数紙はすべてまるで申し合わせたように、安保条約下の日本は米国の植民地が領地のようなだったが、今後は独立・自立の方向に進むだろう、と予想を書いていた。

冷戦下では安保条約廃棄は非現実的だといわれた。しかし冷戦後の今、意図的に仮想敵国を作らないかぎり日米安保に何の意義があるのか。現実に安保条約は変質して、それは日本が守られるためでなく、力による米国の世界政策に日本が協力するための口実に使われ、自衛隊は米軍の指揮下に、国土は米軍の基地に、そして「テロとの戦い」といわれる米国の侵略戦争に「国際協調」と称して協力している。

今必要なのは、まず日米安保条約を破棄すること。戦力不保持の憲法どおり、自衛隊は災害時の救援活動等に専念させ、米国・北朝鮮・韓国・中国等と、何より平和と真善美を求めて協力し、信頼しあう関係を、万難を排して築き上げること。そして殺人と破壊にしか役立たぬ物を作る人たちを儲けさせている、何兆円もの大金を全部、教育・福祉・ODA等にまわすのだ。

(団友)

## カンタータの日本語歌詞を Web 上に公開しました。

「バッハ・カンタータ 50 曲選」完結後も、日本語版楽譜の発行を継続することとし、2007 年内にすでに 6 曲が加わっていますが、12 月末より「バッハ教会カンタータ 日本語歌詞」の表題で、これら全 56 曲の歌詞を Web 上に公開しています。いちど、開いてみてください。

<http://members.aol.com/bachtex>

カンタータ作品の一覧表で、BWV 番号をクリックすると該当歌詞のページにジャンプする仕掛けになっています。現時点では 56 曲ですが、新規に楽譜が発行されるつどここに加えることとし、または推敲を経たものは未刊行作品の歌詞でも掲載しようと予定しています。

どのくらいの方々に閲覧していただけるか、またどんな反応を示されるのか、楽しみにしています。

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 11>

## カンタータ第 16 番《主 ほめ歌わん》

新たな年に われら捧ぐ 熱き思い と、第 2 曲バスのレチタティーヴォの歌詞にある。この 熱き思い とは つづく第 3 曲の 合唱：声あげ喜ばん 恵みまこと 朝ごと新たなり / バス・アリア：祝福あれば われらとわに 幸なるべし という確信のことで、これが実に魅力的な旋律で歌い上げられている。

さらにアルトが、神のご支配のもと、本当の平和のうちに過ごすことが出来るようにと祈り、いかに幸いならん 主イエスに よりたのめば と信仰告白で結ぶと(第 4 曲) これに回答して、テノールがオーボエ・ダ・カッチャに導かれて歌い出す(第 5 曲)。このアリアに、私の心はがっしり捕らえられてしまった。テノールがくり返し歌うのは 愛するイエス なれのみ わが魂の宝 という歌詞である。死の間際に及んでも、あなたこそ私の魂の、何にも代えられない宝なのです、と何度も心に深く彫り刻むように歌っている。

1726 年の元日に、バッハはどのような思いでこの曲を演奏したのだろうか。超人的な勢いで教会カンタータを作曲したバッハの根底に、ルター派の素朴で純粋な信仰が脈打っていたのは疑う余地がない。第 1 曲目に、ルターがまさに改革者らしく自国語(ドイツ語)に訳した「テ・デウム」(中世から伝わるラテン語讃美詩)をソプラノ声部で用い、神を讃えている。バッハが仕えた当時の教会やライプツィヒの市当局がいかに冷たい姿勢であろうと、彼の根底では、神の本当のご支配(平和)を望み、主イエスを真の 魂の宝 として生きることを、深く受け止めていたのではないか。

宗教改革者ルターも、富と権力の癒着した宗教的デカダンス(頹廢)に抗するために、多くの苦しみを味わい、悩みながら、しかし喜び歌うことを忘れずに、どんなに誤解されようと、「聖書のみ」「信仰のみ」「恵みのみ」を軸として希望をもって神の前に生きた。ルターとバッハの生き様が重なる。

新年、合唱団は 50 周年へ向けて錨をあげた。日本語カンタータにこだわって 45 年。しかし、今日もなお「こんな合唱団があったのか！」という会場からの好意的な驚きがあるように、まだまだ「バッハの魂と精神」を伝える使命はつづく。ルターが聖書をドイツ語に訳したように、日本語でバッハを歌う役割は大きい。この曲の最後に、合唱が われら願う 平和の年を / 悩み遠ざけはぐくみませ と歌う、この 熱い思い を受け、わたしたちの新年を皮切る 熱い思い としたい。

(やなぎもと・ひろし。団員：バス)

C D バッハ・カンタータ 50 曲選 [第 2 巻] に収録。  
A 田中奈美子, T 平良栄一, B 宇佐美桂一, 大村恵美子指揮・訳詞, 2000 年録音(第 88 回定演)。